

二〇二六年二月二八日

春陽射す置かれしままの亡妣の杖
たゆたふて暗香となる夜の梅
春耕の小さき足跡体験会
春光の港出でゆく巨船かな
岩場縫ふ水春光にきらめけり
鳥帰る別れの声を落とすつつ

あひる
うつぎ
康子
董雨
なつき
わたる

二〇二六年二月二七日

残雪の話しなどして杜氏帰る
自転車はストップモーション春疾風
雨後の朝晴れて一刷け春の雲
かはゆいと褒められて笑む鉢の梅
せせらぎの流れに乗りて落椿
春光を掬ひ編み込む竹細工

伸枝
山椒
康子
なつき
澄子
澄子

二〇二六年二月二六日

雛壇の下の壇ほど楽しさう
下駄箱の上はギャラリ紙雛
草野球春光を切るバットかな
生駒峯に四方の春信聴きにけり
雪解田の水面に映る空真青
畦焼きの了り夕づつ仰ぎけり
一日の疲れをたたむ春日傘

伸枝
やよい
愛正
たか子
和繁
うつぎ
みきお

二〇二六年二月二五日

畑に慈雨吾は骨休め春炬燵
春光を纏ひて鷺の動かざる
覚えなき草も出でけり庭萌ゆる
手作りの雛に目鼻を入れにけり
春霖に地鳴きの和する小径かな
雨霰瓔珞めきし枝垂梅

千鶴
わたる
うつぎ
やよい
むべ
澄子

二〇二六年二月二四日

山麓の疎林一挙に芽吹きけり
四温晴謝してひねもす畑手入
鉄幹の影濃く落とす梅日和
初雛つむじ綺麗な児の寝顔
ドリーネにくすぶる昨夜の山火かな
春塵を払ひ遺影に挨拶す
春一番棕櫚天空に暴れをり

花茗荷
千鶴
せいじ
澄子
よし女
たか子
康子

二〇二六年二月二三日

しろがねの漣奔る春疾風
ロゼットの古着脱ぐやに芽吹きたる
春炬燵句帳季語集うち広げ
青竹の花器に一輪濃紅梅
寒気蹴る胴着の裾をひるがへし
早春の瀬音通ひ来駅舎かな
春を待つ医師の診断頼みとし

澄子
うつぎ
よし女
風民
千鶴
うつぎ
董雨

二〇二六年二月二二日

梅まつり老若男女みな笑顔
園丁のやふに後ろ手春探る
梅林のどの花となく匂ひけり
下萌えやひねもす動く牛の口
古雛昔の知己は吾ひとり
酒粕の匂ふ店先雛飾る
春疾風小脇に回覧板抱へ

みきえ
たか子
うつぎ
伸枝
もとこ
なつき
うつぎ

毎日句会みのる選・二〇二六年三月二日